

大陸(中支)

青春を捧げた

軍隊生活の思い出(その二)

福島県 大竹 清 照

昭和十九(一九四四)年四月二十日頃、我が第十師隊は師団の南支への転進のため金華の守備を第七十師団の一部と交替し、転進準備に入った。「隠密裡に事に当たれ」という命令で第十中隊は金華外郭から兵を引き揚げさせるのに苦勞した。兵舎内では各自私物の整理が始まった。焼却すべき物とか内地への發送する物の仕分け、兵舎内の清掃などで十日程は多忙を極めたのである。

五月、金華在留部隊は逐次、金華駅を出発して上海に向かつて移動を始めた。我が第八十五連隊の各隊も金華に集合を果たし、第三大隊も五月十一日、連隊と共に金華を出発し、列車輸送にて五月十三日朝、上海江湾鎮駅に到着した。第三大隊は江湾東兵舎で宿営に入った。宿営の理由は我々を乗せる輸送船を待つためであった。この頃既に輸送船団の出航等については頭を痛めていたのである。

東シナ海方面においてもアメリカの潜水艦が出没していて、輸送船は彼らの格好な餌食だったからである。軍の首脳部が部隊の輸送に頭を痛めているのに反し、当の兵隊たちは至極楽天的だった。兵隊たちは自分の行先も軍の目的も知らされてはいなかった。第十二師団が新任地に移動していることだけは分かった

が、さて、その行先となると全く不明であるというのが本音である。兵隊たちは各人、各様に想像を働かせ「日本へ凱旋するんだ」「いや南方の島らしい」と思い思いに行先を想像しては話に花を咲かせていた。

五月二十二日午後、第三大隊に乗船命令が達せられた。兵舎の中は急に騒がしくなって、兵隊たちは、出発の準備のため軍装を整え始め、夜に入り乗船のため棧橋に向かった。真っ暗な闇夜で、今にも一雨来そうな空模様であった。歩兵第八十五連隊第三大隊ほか乗員人員千十七人、乗船した船は「洋第十二号丸（象山丸）」で民間から徴用した船らしく、あまり大きな船ではなかった。兵隊は、ただ黙々と上官の指示に従って船に乗る。暗い海の彼方に上海の灯りが輝いて見えた。

真っ暗な上海の江湾鎮の棧橋に四列縦隊で第十中隊が乗船待ちをしていた時である。後尾の方で何やら急に騒がしくなる。「何事が起きたのだろう」と、いぶかしがっていると苦力クワリの阿張が「どうしても船に乗せ

て一緒に連れて行ってくれ！」と泣いているのだという。棧橋に座り込んで誰彼の見境なく額を地に打ちつけて拝みながらの哀願である。どんなに阿張に哀願されても苦力を転戦する軍に加えて連れて行く事は不可能である。中隊の幹部も兵隊たちも口々に「今度だけは断じて連れていく事はできない！」と叱つたりなだめたり、説得しても、彼はあきらめきれずに「頼む、頼む」の一点張りですすがり付いて泣くのだった。

阿張としても今度も例の通り中隊と一緒に作戦に出動できるものと思っていたのだろう。昨日までうきうきと兵隊たちの雑用を手伝っていたのだ。それが中隊に乗船命令が出て、棧橋に向かって行軍を開始するころから、中隊長から「阿張はここから故郷に帰るよう」と言われ「とんでもない事になった」と大騒ぎを شدしたのである。

思えば彼は江南作戦の途上、苦力として、今井隊が徴発した中国人である。当時十六、七歳の愛くるしい若者は、しごく真面目な従順な性格で、中隊の誰彼にも可愛がられ、また重宝がられていた。中隊出動する

討伐や作戦にも阿張は雑用係としてついていった。落後した兵隊を背負ったり背負袋を持ってやったり、炊事の手伝いをしたり、実に甲斐甲斐しく働いた。第十中隊の今井中隊長、遠山中隊長、乾中隊長と三代にわたり彼は黙々と雑用をしていた。彼の郷里はどこなのか誰も知らない。長い間生活を共にしてすっかり中隊の一員として自負してしまつたらしい。彼は初年兵が入隊すると何かと世話を焼いた。教育中の初年兵などよくこの阿張に「オ前ボタン取レタヨ、隊長さんニ叱ラレルヨ」などと服装の乱れ等指摘されたものである。

金華から上海へと兵隊たちも何の抵抗も感じないままきてしまったが、最後の土壇場に至つて困惑してしまつたのは阿張より兵隊たちである。乗船の時間は刻々とせまってくる。中隊長はじめ将校も兵隊も阿張のために金を集めだした。せめて今第十中隊として阿張にしてやれる事は、できるだけ多くの金を餞別として彼に与えて、我々の去つた後、たとえ一日でも多く彼が楽な生活ができるようにと願うのみである。

想像以上に集まつた金を阿張の手に渡し、中隊長は「阿張、長い事ご苦労であつた、元気で生活せよ」と言つて諦めさせた。中隊の先頭はもう乗船を開始した。「先生サヨナラ、兵隊さんサヨナラ」阿張は泣きながら一人棧橋からいつまでも船に手を振っていた。

漆黒の闇の中、我が船団は、白波を飛ばしながら走る。やがて夜が明け灼熱の太陽が甲板を焼く。どの位南下したであろうか、あたり一面見渡す限りの大海原である。二日経ち三日過ぎ、さすがの陸の猛者たちも、あつちで「ゲイゲイ」こつちで「ゲイゲイ」と、連日船酔いには勝てない。でもいつ襲撃して来るか分からない敵機や敵潜水艦に対して、甲板には対空対潜監視の見張りをしていなければならない。幸い自分は船酔いには強かったので見張りの監視哨をかつて出て、三時間位通して勤務した。

甲板の上を歩いていたら同郷の隣家の五十嵐章夫君に会つた。彼は船酔いですごく弱っている様子だつた。一年次下の初年兵で第七中隊だと言う。その内監

視哨の誰かの「オーイ島だ！ 陸が見えるぞ！」との声で皆甲板に出て見る。「ここはどこだ」船の着いた所は、台湾の高雄港であった。「台湾だって……それじゃ日本じゃないか俺たちはここへ上陸するのかわ」
「馬鹿言うなよ、もっと南の方に行くんだ」。自分たちの行先を知らされていない兵隊たちは勝手な想像をして思い思いの話をしている。

碇を下ろした船の回りにはたちまち数隻の物売船が集まって来て「バナナ買わないか」「飴買って」と呼び声を上げている。兵隊たちは、出発前に給料をもらったばかりだったのであちこちでバナナや飴等を買っていた。バナナの安い事、大きな竹籠一杯で五円であった。小隊員全員で食べても食べきれない程だった。飴、菓子等も一円程買ったら両手に抱える程来て、持て余すほどであった。「どうして、こんなに安いのだろうか」と思って聞いたところ「最近船の便が悪く内地への産物を送り出すことができないので品物が大ぶついで、台湾に寄港する兵隊さんたちは最高のお客様だ」と言う。

三日程高雄港に停泊した。ここで補給をし五月二十九日夜、再び碇を上げて出航した。護衛には支那方面艦隊が当たり一路香港に行くらしい。南シナ海を南十字星を前方に見て南下した。昔から南シナ海には海賊が横行していたと言うが、今はそんな物ではない。対岸の厦門には敵の飛行場があると言う。高雄と香港間は、第二支那派遣艦隊と高雄警備府第一海上護衛隊が協力してくれたのだと後日知らされた。お陰で敵の攻撃を受けることなく、我ら第二輸送梯団は六月二日、黄埔に上陸した。

五日に同地を出発、師団は「ト号作戦」準備と隸下の各部隊の集結を計るため、広東中山大学をその集結地と定め、五月末日既に師団司令部及び第八十五連隊本部は中山大学に入った。輸送船の都合で未到着の連隊もあって暫くここで作戦準備の休養に入った。

第一輸送梯団の第八十四連隊はすでに到着していたが、次の第三輸送梯団の第八十六連隊及びその配属部隊輜重兵の馬匹の大部分は、第九十一船団計四隻に分乗して出帆した。部隊は五月二十二日に上海に集結

したが、第一次輸送に従事した第八十八船団が香港からの帰港時の五月二十日、東沙島沖で敵潜水艦の攻撃で損害を生じたため船舶の不足を来たし、約一カ月間海上で待機させられた。

第八十六連隊・中川連隊長は、海上輸送対策について周到な準備と訓練をしたという。例えば軍旗は分解して牛の腸の干したもので包み、さらにゴム包装をして油紙で被覆し、ブリキ缶に入れて密封し、特別な標識を付けて海上にて浮遊し得ると同時にその発見を容易にして、これを部隊に周知させたと言う。また竹筏を多く作って積載させ、これを浮子の代わりに準備し、なるべく多くの手旗を準備して各人に胴着させ、海上浮遊間の連絡に使用させる等、その避難対策にも万全を図ったのである。

六月二十四日、上海港を起航、高雄港寄港、三日後の七月四日、東沙島南西約百八十キロの海上を航行中、敵潜水艦の雷撃を受け、三隻が沈没した。遭難者の約七割はかろうじて救助されたが、兵員約六百人と

馬匹及び武器・弾薬・装備品は一切海没してしまった。幸いに軍旗は無事であった。

部隊は七月五日、着のみのままの状態で九龍に上陸、中山大学に集結してきた。船腹不足のため上海に残された第八十六連隊第三大隊は、中国方面艦隊の駆逐艦で六月末上海から香港に輸送され、遭難した連隊主力より先に中山大学に集結していた。第八十五連隊第三大隊は中山大学の学生寮の一角に、我が第十中隊も同じ建物の部屋を割り当てられ宿営した。建物は鉄筋四階建でかなり大きいものだった。前庭には何か所も大きな池があり、その中には何匹とも知れない食用蛙がいて、夕方になると「ゲー、ゲー」と不気味な鳴き声の合唱で賑やかになる。

この中山大学は抗日運動が最も激しい学校で、中国の抗日学生運動はここから始まったのだと言われている。昔「豹子文」「豹文胡」と言う中国華僑の兄弟が成功し、故国に何か記念すべき事業をと、ポンと出した資金でこの大学ができたのだという。スケールの大きいには驚嘆の外はない。敷地の広さは四キロ四方

で当時の日本の東大の何十倍とか、まさに想像も出来難いものであった。構内には鉄筋建ての建物があちこちに点在し、各部ごとに寄宿舎も有り、第二十二師団全部隊が入ってもまだ余る程だと言う。構内には小高い丘陵形の小山が無数にあり、これらが遮蔽となって全体を見渡すことはできない。

我が第十中隊の兵隊たちは翌日から宿舍の横や前の松の木の下、裏山の松林や雑木林の中に退避用の防空壕掘りを命ぜられ、分隊ごとに蛸壺式の壕掘り作業を行った。また、アマーバー赤痢にかなりの者が感染した。遂に自分も感染した。

広東飛行場周辺の農村部落には、すでにゲリラ部隊が潜入して、夜間一定時間になると部落の農民と共に花火を打ち上げ米軍機を誘導するのである。目標は、中山大学の我が部隊の集結地を知らせる合図である。午後八時頃であったろうか爆音が上空に聞こえ、B25三機が飛来した。はじめに小さな落下傘を付けた照明弾が投下され、下界は真昼のように明るくなる。宿舍

に残っていた病人の我々は戸外に飛び出し、昨日掘った蛸壺に夢中で頭から飛び込んだ。一瞬物凄い爆音と共に、すぐ近くに爆弾が落ち、その土塵砂塵が頭上に降って来て土砂で生き埋めになるのかと思ったがどこにも異状はなかった。

爆弾は建物には投下しないで、ほとんどが建物の周囲に投下する。宿舍の窓ガラスは皆粉々に割れている。悪夢の夜も明け、隣の建物の第八十六連隊の被害はどうかと行ってみると、運の悪いというか自分と同じ蛸壺に入っていた者が直撃弾を受け、首が足が手が胴体が皆バラバラになって吹っ飛んで上の松の枝にぶら下がっている。軍馬も相当の数が倒れているようだ。第八十六連隊の兵隊が「何で俺たちだけがこのような悲惨な目に遭わなければならないのだ。神も仏もこの世にないのか。輸送船でやられ、命からがら着の着のままですよやくこまで来たかと思ったらこの有様だ、まったくついてない」と嘆いていたのが忘れられない。初めて空襲の恐ろしさを味わった昨夜の惨状であった。

師団は、この空襲の損害でまたまた戦力に多大の影響を与えられた。特に馬匹の補充は容易ではなく、苦力の大量配属と一部水牛によって積載能力の不足を補うはかばかかった。

作戦準備を整えた連隊は七月中旬、船で新会（廣東東南方約七十キロ）付近に前進した。黃浦から皖部隊（陸軍船舶部隊）の誘導により珠江のデルタ地帯を通過して昼間航行したが、幸い米軍機の攻撃を受けることなく新会付近に集結した。翌日中隊は梅林里、鶴山と敵の牙城へ迫って進撃して行った。

赤土だらけの秃山を幾つか越え広西省に入った。この辺から周囲の景色ががらりと変わってきた。部落の形体からして違ってきた。頑丈な土塼に囲われた民家、部落の四方に設けられた望楼等、全く外敵に備えての防禦がほどこされ、我々を威圧するようであった。小石混じりの赤土の大地、山はそれ程高くはないが小さい小松が生えているだけで、緑葉樹らしいものは見当たらず荒涼たる風景である。この丘陵地帯を行軍し宅梧壑、高清水へと黙々と歩いていった時、道路右

側の大きな岩の割れ目からこんこんと清水が湧き出ているのに驚き、兵隊たちは皆この清水を戦地に来て初めて乾いた喉へ流し込んだ。

故郷の清水と同じなので懐かしく思えた。絶対に生水は飲むなと、注意されていたが地下水なので心配はなかった。中国大陸に来て地下水の清水を飲んだのはこれが初めてであり、最後であった。

暫く前進して行くと、前方の丘陵地帯から敵の猛射撃を受ける。中隊は直ちに散開して応戦する。両翼に分かれて進んでいた大隊本部、第九中隊の方向からも盛んに彼我の撃ち合う銃声が聞こえてくる。我ら兵隊たちは乾燥しきった赤土の大地を砂塵りをあげながら敵陣目掛けて突っ込んで行った。数時間の比較的短い戦闘ではあったが敵は陣地を捨てて敗走し、中隊は領港城まで進出することができた。

それから間もなく前進中の夕方、尖兵中隊長として敵偵察中の乾中隊長と当番兵の阿部一等兵が、敵弾に足を撃たれて負傷するという悲劇となった。先の浙

贛作戦では遠山隊長が負傷し、第十中隊はよくよく隊長にはついていないと兵隊たちは皆がっかりした。

進軍時なので第一小隊長だった田中正直中尉（予備役）が中隊長代理となり以後の指揮を執ることとなった。九月下旬から十月の初めにかけて南支の暑さは格別であった。休憩と言っても木立もなく、山の中を重い装具を背負い痛む足を引き摺って歩いた。山間の小さな部落を見つけては食料の調達をするのだが、山中の小部落には食料になる物は何一つ残されていない。

住民の避難した家屋は廃虚のようで、何となく空気がま다가カビ臭く、我々は空腹をかかえて連日山の中を歩き回った。中隊長代理となった田中中隊長には連隊より十万分の一と言う地図を渡されていて、主な県城や主幹道路等は分かるが、山岳地帯の点線路等に至っては全く判断がつかず、この不鮮明な地図で前進地の部落を探すにも真に困難な図面であったと言う。従って指揮官はこの図面に記されていない部落を探しながら点線路をたどり、自分の隊を目的地に進行させなければならず、本当に苦勞な事だったと思う。我々兵隊

は指揮官の命ずるまま、ただ黙々と歩くのみであった。

連隊主力は筋竹扨を経て嶺添県城を攻撃することになり、各大隊に、その命令を下達した。第三大隊長橋爪少佐は第九中隊を尖兵にして自らこの戦列に加わり、第十中隊は大隊の護衛として大隊本部の後尾約二キロの地点を筋竹扨方面に進軍していた。ところが、とある山中で小休止をした後、第十中隊は再び大隊を追って行軍をしたのだが行けども大隊後尾の姿を見つけない。「大隊本部も随分早い速度で行進してるんだなあ」と中隊の兵隊も思いつつ、さらに大隊を追及すべく四時間位休みなく行軍した。

しかし「ちょっと変だなあ」と感じ出した。いくら大隊本部が急進撃をしていると言っても、三時間も四時間も休憩無しで行進しているとは考えられない。とうに先の部隊の姿が見えるはずである。これはきつと道を間違えられたのではないだろうか」等と不審がる者もいたが、先頭の中隊長は必死になって歩いてい

ので誰も進言する者もなく、ただ指揮官の命令にて歩くのみであった。

何回休み、何時間歩いただろう。既に日没となり、辺りには部落も無く自分たち以外には人影もない、中隊は迷路に迷い込んだのか、一日一晩歩き通したのだった。夜が白々と明けて付近の地形が判別できるようになった時、誰も彼も啞然としてしまった。昨日休憩した湖の畔の大銀杏の木所へ来ていたのだ。「オイ、この木は昨日休んだ所じゃないか」何の事はない第十中隊員は一日一晩歩き続けて、大きな山を一巡りして、また元の所へ帰って来た事になったのだ。更に中隊は前原小隊をも見失ってしまった。

中隊がこのような迷路を歩いているとも知らない尖兵の前原小隊のみは、大隊本部の後尾約五百メートル位の所を大隊の弾薬行李班の護衛として行軍していた。大隊の部隊が軍行路を左にカーブして、その突端を曲がった時である、約百メートル位の向かい側の岩山にポツカリ空いた洞窟から一斉に射撃があり、大隊の行進はできなくなってしまった。駄馬を元の方向に

避難させ、応戦するには行李班には小銃しかないの
で、橋爪大隊長は、我が前原小隊に対し、「軽機、前
へ！」と号令を下した。この時、軽機は自分が持っ
いたので、早速一本の柳の木の根元に軽機を据え、洞
窟に向かって軽機の引き金を引いた。

自分のすぐ後ろで大隊長は双眼鏡で自分の射撃の弾
着を確かめて「弾着よし！」と言われ、洞窟の敵に向
かって乱射した。敵は射撃を中止し敗走したらしい。
これでようやく大隊の行進が安易になり大隊長からは
「どうも有難う」と御礼を言われた。「以後の行進を容
易ならしめた」と、お褒めの言葉も戴き光栄の至りで
あった。また大隊長から後の蒙扨の戦闘の時にも敵陣
地占領と言う事でもお褒めの言葉も戴いた事など忘れ
得ぬ体験であった。そして大隊は、坡塘墟の渡河を敢
行して領漆市街に突入した。

この頃が、第十中隊が山中の道を迷っていた時で
あった。第三大隊は第十中隊欠のままこれに加わり、
辛うじて第三大隊（橋爪少佐）の面目は保ったが、第
十中隊は大隊長より散々に叱り飛ばされることとなっ

た。指揮官の命令のまま行動していた兵隊たちにとっては踏んだり蹴ったりの災難続きで、体の疲労が一段と加わるようであったが、その中で一人尖兵小隊の前原小隊だけはあの洞窟からの敵の襲撃を軽機をもって撃退した功があったので哀案を分ちあった。

また、大隊は坡塘墟の渡河地点に戻り、師団の渡河を援護するため現地付近の民家を占領して宿営に入った。二日半程、飲まず食わずで広東省界の山中を行軍、行軍で歩き通した中隊の兵隊たちにとっては救われたように皆眠った。そして師団の渡河を援護するため渡河地点の警備についていた。第三大隊も師団の渡河が完了するやその任務を解かれ、十月十六日の夕刻連隊の後を追って平南県の平野を行軍して行った。

〔編注〕

大竹清照氏の手記（その一）は、第四巻に掲載されております。

戦地で聞いた玉音放送

神奈川県 荒井 優

私は大正八（一九一九）年生まれで、昭和十五（一九四〇）年一月に現役徴集されて独立混成第八旅団通信隊に入隊し、北支、中支を転戦して昭和十八年十一月に満期除隊となりました。しかし、昭和十九年二月に相模原の電信第一連隊に召集され、新しく編成された電信二十八連隊に編入され、同年四月には漢口に移動しました。ここには電信第十三連隊が駐屯していたのですが、湘桂作戦に転進したため、その後を我々が引き継ぐことになりました。

電信二十八連隊では、本部、材料廠、六つの有線中隊、無線隊から編成されていて、本部と無線隊と材料廠を漢口に置き、各線中隊はあちこちに配置されていました。私は波隊と呼ばれた無線隊に配属され、被服係を担当していました。漢口に到着してから一年近